

JR東海労なごや

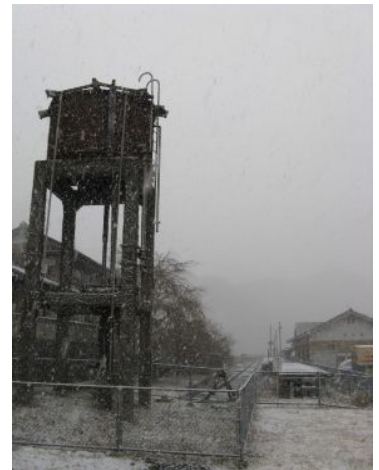
2010年11月7日 No. 822
JR東海労名古屋地方本部
発行者：山田哲也
編集者：教宣部

錆びたレールに目を背け レールのない鉄道に 莫大な投資をする鉄道会社

不採算部門を切り捨て、

リニア中央新幹線構想を進めるJR東海

2009年10月29日、JR東海は台風被害で不通になった名松線の家城駅から伊勢奥津駅間を廃止するとしました。その時以降、地元住民は生活手段を奪われ、不便を強いられています。



【伊勢奥津駅の給水塔】

10/14中日夕刊

JR東海は弱者の声を聞くべきだ

名松線などの地方交通線は、その名が示すように地方のローカル路線でほとんどが赤字路線です。ですから会社として不採算部門の切り捨ての危機に常にさらされているのが現状です。

一方、大多数の地方交通線は幹線からのび、いわゆる盲腸線として地方から都市部へ向かうための地域の手段として存在しています。地域住民にとって重要な足としてかかせないものであり、幹線へのアクセスになるものです。そして、過疎化が進む地方にとってそこに住む老人や学生にとっては、まさに生活手段なのです。

こんなところにもリニアの弊害？

JR東海は、5.1兆円をかけリニア中央新幹線構想を進めています。一企業単独としてのプロジェクトとして、無謀とも言われています。JR東海は莫大な投資をひかえ不採算部門を切り捨てようとしています。鉄道を必要にしている地域の人々を犠牲にして、はたしてリニアはどれだけ役立つのでしょうか。私たちは疑問を抱かざるを得ません。

残暑が厳しかった九月下旬、津市南部を走るJR名松線の家城駅で、病院から帰る途中の女性(モ)がベンチに腰掛け、代行バスを待っていた。昨年十月の台風で線路が寸断されて以来、JR東海は家城駅から先を代行バスに切り替えている。

「揺れも少ないし、鉄道の方が良かった」と話す女性の自宅は、終点の伊勢奥津駅近く。病の夫の療養を兼ねて三年前、大阪から引っ越して

目録

名松線から独り暮らししたが、晩年を夫とともに過ごした町を離れるつもりはない。不便利でも「バスがあるだけ感謝せん」と明るく振る舞う。

さびで赤茶け、雑草で覆われた線路が、列車の走らなくなった期間を物語る。鉄道復旧を願う住民と、代行バスに理解を求めるJRは平行線のまま。解決策が見えないまま、一年が経過しようとしている。

(角雄記)